

ジョジョの奇妙な冒険RTAお嬢様ですわよ～！！

ファニファニですわ～！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

読んで字の如くですわく!!

目次

プロローグってやつですわ〜！	
「某嬢の奇妙な冒険RTA開始ですわよ!!」	1
「勝った！ジョジョの奇妙な冒険完!!」	6
「こう呼んでくださいませ。嬢太郎と！」	9
いわゆるオリチャーですわよ！	
「お嬢様の勘ってやつですわ」	13
「わたくしの完璧なRTA仕草をとくにご覧じろですわよ！」	
17	
「最適化された超論理的な行動ですわーッ!!」	20
次回 わたくし、逮捕 ですよ?!	24
「だから！光ッ!!ですわ！」	28
「わたくし、絶体絶命ですわーッ!!」	31
「エジプト出禁、ですわよ！」	35
大胆なカットはお嬢様の特権ですよ。	39
計測開始！	
旅はこれから始まるのですわ！	43
「イエス！マッハ！マッハゴーゴー！マッハサイコー！エンジン ゼンカイ！」	48
「いやしんぼですわね♡」	53
「ギイックウウッ!!ですわ」	57
チャートが狂うからでしてよ	63

プロローグってやつですわ〜!

「某嬢の奇妙な冒険RTA開始ですわよ!!」

オレが【目覚めた】ときのお話を聞いてくれ。いや、スピリチュアルなやつじゃなく。この世の真理を理解したというか、悟ったというか…。だからスピリチュアルなやつじゃございませんわ!

あ、やべ。……オホン。油断するとすぐ出てくるんだよな……。

前置きはいいつて? まあ最近の若い奴つてのはそういうの嫌がるよな…。年寄り臭いつて? 悪かったな。

えっと…でなんだっけ?

あ、そうそう。

あれは霧がかつた月の晩だった。

「モハメド・アヴドウル?」

「ええ」

「モハメド・アヴドウルって言った?」

「珍しい名前でもないでしょうに。そうです。わたしはモハメド・アヴドウルです。それで…占いの続きをしても?」

「ごめんあそばせ。少々お待ちいただけける?」

カイロの夜、美しい星空のもとに広がる雑多な街の片隅。ハンハリリー市場。霧のせいで灯りはぼんやりと曇り、どこもかしこもいかがわし気な雰囲気広がっていましたわ。

わたくしはホテルを抜け出して、ふとした思いつきで占い師に占いを頼みましたの。そこで、占い師の名前を聞いた途端に急に強烈な違和感に襲われましたの。そう。

っていうかなんなんだこの口調は。え? わたくし? 私? オレ? あ

れ？

アレ？あれだよ。モハメド・アヴドウルってジョジョにでてくるキャラだよ。ね？

「……………わたくしの名前ってなんですか？」

「さっきご自分で名乗ったでしように」

アヴドウルは不審そうな目でわたくしを……………わたくしって。いやなんだよこの一人称。オレ？オレを見つめ、さっきオレの口から名乗った名前を言った。しかし、不思議と自分の名前とは思えない。

「……………ふー…む。なるほどですわ……………」

「調子が悪いようなら、お代はよろしいのでホテルまでお送りしましょう。大通りのそばとはいえ一人ではやはり危険ですからな」

「いえ、結構ですの」

オレは立ち上がろうとするアヴドウルに手をかざし制した。

そう。オレはなんでこんなフリツフリの服を着て、さらにはふわふわいい匂いを漂わせる髪の毛を結って、こんなふざけた口調でカイロの路地にいるんだよ!?

オレは…オレは確か…何をしてたんだっけ？オレの本当の名前はなんだ？

断片的に脳裏に浮かぶのは、漫画を読む手。それくらいだ。

これをオタク的に解釈するならば…

「転生…」

「は？」

いよいよオレと関わりたくなさそうなアヴドウルが商売道具をかたそうとしている。このチャンスを逃してたまるか！突然のことでオレは混乱してるんだよ！

「ちよっとお待ちを！…お待ちを！…わたくしあなたにどうしてもお願いしたいことがありますのよ！」

「わたしは占い師ですよ？占い以外でお役に立てるとは思えませんな」

「違いますの！ええーつと…そのー」

アレ？アヴドウルっていつ承太郎と会うんだっけ？今って何年で

すの?!ど忘れしましたわ。

でも少なくとも店を出して戻ってことはまだD I Oがエジプトでアヴドウルを勧誘してはいないはずだから…。

「アヴドウルさん、わたくしを弟子にしてくださいませんか?!」

「弟子?」

「そーですよ!えーと、占いのみならず。わたくしなんていうか特別な能力みたいなのがありますの!そばになんかいるっていうか念能力ってどうか:サイキック。そうですよ!そうだったたぐいのものをあなたにも感じるんですよ!!」

「サイキックですか。やれやれ、突然言われても:困りましたな」

「もちろん報酬はお支払いしますわ!ええ。そうだ!わたくしってお金持ちなんですよ」

そう。とつさのことで忘れていたがオレはこの世界ではなんかすげーお金持ちだ!だからなのか?!このお嬢様口調は!!オレは家族とバカンス真つ最中だ。弟子入りなんてするタイミングじゃない、が今この場で好きな漫画の世界に関わるチャンスをふいにするわけには行かないだろ!

「お金の問題ではありません」

アヴドウルは冷静に言った。

「あなた、さきほど特別な能力と言いましたな。それでは今その力を使ってみてはくれませんか」

「え……えーと……」

さつきはとつさの思いつきで口からでまかせを言ったが、よくよく考えるとオレ、スタンドなんてこれまでのお嬢様人生で使ったことなかない?

「ん……んーっ!!……おかしいですわね。今日はちよつと調子悪いかもしれませんわね」

「……なるほど。では今、なにか変わったものは見えませんか?」

アヴドウルはじつとオレを観察する。その眼光の鋭さに思わずたじろぎそうになる。変わったものなんて見えない。だがこの感じ、ハンターハンターのあれと同じ感じがする。仕事紹介所のアレだよア

レ。

「えつと…か、感じますわー！めっちゃ…炎のように熱い何かを！」
「なるほど…もういいですよ」

「えっ。いやもうちよつと待てば多分いけますわー！」

「いえ、残念ながら私では力にはなれません。特別な能力というものも…まあそういうのを感じる時期なのかもしれないな。若いときはよくあるもんです」

「そ…そんな…！」

嘘。そんなことある？普通こういうのって見えるよね…？

「お引き取りください」

こんなところで…転生特典とかなにもなく無能力者として退場なんてことある？

物語も始まってないのに？

「あ…あ…ありえせんわ」

「なんて？」

「あ…諦めせんわよー！！」

オレは叫んだ。

そして夜の市場へ駆け出した。

そしてオレはその日からジョジョの登場人物たる人間になるべく、お嬢様としての…この世界での自分を捨てエジプトにとどまることにした。

そう、まだ希望は捨てていない！

ここにいれば必ず好機は訪れる！

そう、あのスタンドの矢をぶつ刺して生き残ればオレは舞台上がれるはずですよ！

そして仲間ノードス&最速でDIOをぶつ倒してやりますわ！！

「わたくしは…ッ！しぶといんですのオ〜！！」

今世の名前は捨てた。前世の名前ももう思い出せない。

今日からはいわば

「某嬢の奇妙な冒険RTA開始ですわよ!!」

「勝った！ジョジョの奇妙な冒険完!!」

オレはお嬢様としての名は捨てたが、立場は捨てたわけじゃなかった。

オレの暴挙は16年間たつぷり金をかけて育ててくれた親を裏切る…というようなことはなく、エジプト修行編についてこの世界の家族は思ったよりすんなりと認めてくれた。武者修行を看過してくれるほどに余裕がある家庭らしい。

アヴドウルとの衝撃の出会いでこの世界での記憶が吹っ飛びかけたが、オレはこの世界ではだいぶ恵まれた生まれだったらしい。ここ、これが転生特典…？だったらSPW財団関係者が良かったんだか?!
とにかく、オレはエジプトで遺跡の発掘に手当たり次第に参加するイカれたお嬢様と化したのだ。

はじめの方こそ

「お嬢!!ちんたらしてんじゃねえ!!」

などと現地のパワー系労働者に怒鳴られたりもしましたが、レイプやカツアゲの危機は金の力でぶん殴りつつなんとか居場所を作りましたわ。

遺跡を発掘する日々はわたくしの体を容赦なく鍛え上げ、スタンドの矢に貫かれてもものともしない肉体を作りつつありますの。…は!また脳内までお嬢様言葉になってる!

この口調はある種のデバフか、キャラ付なのか。なぜかまったく矯正できない。

「にしても…全然矢が見つかりませんわねえ…」

発掘労働者が使う食堂で、オレはコシヤリを食った。うめえ!オレのような小娘ははじめめちやくちや目立ちましたが全員にお酒をおごつたら余裕でしたわ!お金って最高ですの!~!

時々アヴドウルの店に通うことにより好感度もあげてチャートは完璧だな!と思いたいところだが…実はオレ、ジョジョは好きだがそこまでオタクでもなく、正確な年表を覚えていない。しかも転生前のあやふやな記憶しかないのだ。

矢がすでに掘り起こされてエンヤの手に渡っている可能性も無きにしもあらず。奇妙な事件や出来事は未だに起きてないからおそろく大丈夫と思いたいが…。

あ、労働仲間のおっさんが食い終わってこっち来ましたわ。

「嬢、午後の現場何人が飛んだらしいぜ」

「おファックですわねえ〜」

現場監督である大学教授もやる気がねえですし、もうこの現場糞ですわ〜！

「補充人員はいますの？」

「ここで何人が声かけたらくるってよ」

「日雇いリクルートクソガバで最高ですわね！」

わたくしはコシヤリをかつこんで現場に向かいましたわ。あ！またお嬢様言葉に侵食されましたよ！！

休憩時間も厳密ではないためとつとつとツルハシを持ち上げ発掘に精を出しますわ。人工物がない岩を砕くのが一番肉体的に楽だしで何も考えなくて精神的にも楽ですわ！

でも一心不乱に岩ぶち砕いてるといずれば遺跡にぶち当たるもんですわ。私は一度ツルハシをおいて周りに伝えます。

「センセエー！ツツ！！」

こう呼ぶと大学教授が飛んでくるので、私は次の岩を砕きに行きますの。

もし矢が発掘されたとしてもどうせのちに噂でそれが届くのでどうでもいいんですの。岩砕きはもはやライフワーク。もうこういう日常でいいんですの！よくなりつつある！だめですわー！

「矢アーーー！」

「……………あの……………」

「はい？」

「遺跡にあたったたら…先生を呼べばいいのか？」

そう尋ねるのは見慣れない顔。食堂で声かけた新入りか？これと言って特徴がないが、白人だ。珍しい。まあお嬢様のオレが言うのも

なんだが…。

「あー、ちがいますわ！ほんとはこの土とハンマーでもっと削ってからですわ。わたくしは一度ぶっ壊して怒られたからよんで逃げてるだけですわよ」

「なるほど。ありがとう」

「いいってことよ、ですわ」

修正力が働くかのごとくお嬢様言葉になりますわね。

この日は結局いつもどおり、発掘作業後即寝した。というか体が労働に慣れてここ半年以上ずっとこうだ。気持ちがいいぜ！前世ではもともとこういう肉体労働をしていたんだらうか？

これから3日、その現場でオレは地面を掘り続けた。しかし矢は出土しない。これもいつもどおりだ。

まあこの現場も外れかなーと次の現場について思いを馳せながらつるはしを地面に叩きつけるとぱかん！といつもと違う感触がした。センセエー！と絶叫しようとした瞬間、石の隙間からキラリと光るものが目に入る。

オレはすぐに飛びついて石をどけ、砂をはらい、皮が何かで包まれたそれを発見したのだ。

「で……デステイニー!!!」

オレの絶叫に何人かがぎよつとして振り返る。しかしすぐに見なかつたことにしてくれた。オレの日頃の奇行のおかげだ。

そう。苦節8ヶ月でようやくオレはスタンドの矢を手にしたのだ
!

「圧倒的！圧倒的運命力ですわ！これがお嬢様のデステイニードロ
！」

矢じりの模様もなんか見たことがある！

これもしかしてオレが全部独占しちゃえばDIOがスタンド使いになることもなく、承太郎たちが旅に出ることもなく物語は開始前に終わるのでは?!これはまじで正解のチャート選んじまったなア！

「勝った！ジョジョの奇妙な冒険完!!」

「こう呼んでくださいませ。嬢太郎と！」

六本あるそれをオレは迷わず！ノータイムで！胴体**にぶつ刺した**！！

「は?!」

ああ、オレはテンションが上がりすぎてあっぱらぱーになってたに
違いない。六本も刺す必要なんて微塵もなかったし、ましてやこの場
で矢を試す意味は全くなかった。必然性ゼロだ。

オレは地面に倒れた。周りは騒然としている。そしてオレは六本
もの矢を突如自分で突き立てた異常者（オレ）を目を丸くしてみても
一人の男と目があつた。

昨日オレに質問してきた新入り…ソバカスのある青年。ここでオ
レはようやくと思ひ出した。

こいつドツピオそっくりじゃね?と。

「ホーリーシィツクト!!!ですわ！」

オレの矢6本胴体ぶつ刺し事件は、オレの実家のパワーによって解
決した。お嬢様つてこれだから最高ですわ〜！

とはいえ、目が覚めたら実家近くの病院にいたのはちよつと困つ
た。医者いわく6日間生死を彷徨い一月も意識不明だったらしい。
これが六本ぶつ刺したせいなのかオレの体がクソザコだったからか
なのかわからんが。

矢の行方はわからない。わからないっていうか十中八九若き日の
ディアボロが盗んだんだと思う。これが運命…いや、重力つてやつ
か。

せつかく掴んだすべての元凶をオレはノリで手放してしまった…。
でもくよくよしない！

とにかく！

「わたくし生還しましたよ!!」

「しばらく見かけないと思っていたら事故にでもあつていたのか」

そしてこちらは敬語が取れたモハメド・アヴドウル。好感度は順調に上がっているようだな！

そう。病院抜け出して即エジプトに戻ってきたぞ。実家はめっちゃ怒ってるだろうけどもはやオレには関係ないですわ！そう言いなながらガッツリクレジットカードはパクって来てるしお金も死ぬほどおろしてますの。卑劣なムーブはお嬢様の特権…！そんなことない？うるさいですわね。

「死線を彷徨いついでに、一番はじめに会った時の話に戻していいですか？」

「はて……なんの話をしたかすっかり忘れたな…あ。ソ連が崩壊するとか熱弁していた…？」

「いやいやいや。違いますわよ！ちなみにソ連はマジで崩壊しますわ！弟子の話ですわ〜！」

「ああ…てつきり諦めたのかと」

「三途の川を渡りかけたことでついに！これまで不調だった私の能力が目覚めましたの！」

「なるほど」

「見て驚けですわ！」

オレのスタンドはおそらく近距離パワー型、破壊力はCとAってとこだな。振れ幅があるのは特殊能力に由来するんだが、これが強いような弱いようななんとも言えない感じではある。それにオレは一体どんな精神性をしてるんだよ？と疑問を呈するようなものなのだが…まあ、お嬢様だしって感じた。(お嬢様だから、何？)

オレが能力について話すと、アヴドウルはやや不審げにオレを見た。

「これまでなぜ隠していた？」

スタンドの矢について話すとこれからややこしそうだし、もう動き出してしまった物語をここからアヴドウルと二人で引っ掻き回したらもうRTAどころじゃなくなる気がする。オレはしらばっくれる

事にした。

「あなたがわたくしの師匠に相応しいか観察していたんですの！」

「じゃあ初日のアレは一体……」

「ジャブですわ」

「ジャブ」

「お嬢ジャブ」

「……一つ忠告をしておこう。自分の能力はそうべらべら話していいもんじゃあない。いくら師匠に対しても、な」

「っ……つまり……！」

「いいだろう。ここ十ヶ月君を見ていたが、悪い人間ではない。それにこんな危なっかしいスタンド使いを放って置くのもわたしの主義に反するからな」

「ほ……ほほほほ!!これがお嬢様コミュ力ですわ!!」

なんか失礼なことを言われてた気がするが、まあこれもお嬢様だから多少はね。

舞い上がり高笑いするオレと、十ヶ月に渡る交流でそれに慣れてきたアヴドウル。異常な光景が完成しつつあるな。

「ただ弟子と言ってもわたしに教えられることなど生きていれば身につくものだと思うがね。それに君の能力は早々暴発するものでもない。付け加えて言うならば君は鍛錬の面でも十分行っている」

「ふ……イヤですわねえ。アヴドウルさん。お嬢様が師匠を求める理由なんて一つですわ!」

「それは一体?」

私は拳を天に突き上げました。

「また見ぬ強大な悪を打ち砕くため!」

「君は本当に意味がわからないな……」

アヴドウルはため息混じりに笑って、手を差し出した。

「ではあらためてよろしく、ヴァ……」

「おまちを!私これまでの名前は捨てましたので」

「ではなんと呼べば?」

「そうですね……こう呼んでくださいませ。嬢太郎と！」

いわゆるオリチャーですわよ！

「お嬢様の勘ってやつですわ」

私いつだって話が早いのが好きですよ。なので事が起きるのを待つのでとにかく苦手ですの。これが前世からの性分なのか、この世界で生まれてからのものなのかはわかりませんが。

スタンド能力を無事身につけて、ただその時を待つなんて

「できっこない!!ですわよね」

私のキメポーズにアヴドウルは華麗なスルー。そう、アヴドウルの弟子となったわたくしは彼の店の手伝いをしていますの。一流のお嬢様になるには発掘現場での肉体労働とこのような下積みが大切なのですわ? そうなんですか? 初めて聞きましたわ?!

RTAと言った以上はチャートってやつを組まなきゃですわよねえ。……ってハッ! オレはまたもお嬢様言葉がデフォオになつてる。

えーつと、とにかくオレは3部を最速で終わらせるにはどうするべきかと考えたわけ。こういうときはまずロスから消していくべき。まずタワー・オブ・グレーのいる飛行機、これは明らかにロス! だったらはじめから船のほうがいくらかマシである。

ポルナレフが香港でスタンバイしてインドではJガイルとホルホースが……ってこれも全部ねえ! タイムロスなんですわよ!!

いえ、もちろん彼らの葛藤や復讐がロスと言ってるわけではないのですわ。ですが最速を目指すならポルナレフの復讐はこの準備期間中にとつととやっちゃうべきなんですよ! 50日というタイムリミットの中じゃあなくって。

わたくしがディアボロから矢をパクられ早二月、矢はほぼ確実にエニヤに渡ってるはずですわ。DIOがスタンド能力に目覚めていてもおかしくない。

DIOをエジプトで探したところでわたくし勝てるわけないって
いうか最悪配下ですしね?!

ですので！今日は…

「アヴドウルさん。わたくし今日は収録がありますのでこのへんで失礼いたしますわ」

「収録？CDでも出すつもりかね」

「フフ…今日の午後六時半にテレビをつけてくださいまし。局はどこでも大丈夫。なんならラジオでも大丈夫ですわ」

「どてつもなく嫌な予感がするのだが」

というわけでわたくしはテレビ局でフリツフリお嬢様服を身に纏い、ザ・オジヨー！と言わんばかりのオーラを振りまいていますわ〜！

ところでこの瀟洒な格好のお嬢様つてのはイスラム教徒的には多分NGだと思えますの〜！でもお嬢様力が高すぎて完全に別の生命体だと思われておりますわね。誰も目を合わせてくれませんわ〜！

さあ、番組が始まりキューランプが灯ります。司会が普段の挨拶を言つてふにやふにやと今日の出来事を述べ、一番はじめのCM枠がわたくしの出番ですの。すべてのチャンネルで当時放映！金が！飛びますわ〜！でもお嬢様だからへっっちゃら〜！

さあCM枠の開始ですわよ！

30秒しかありませんの！まきで煽ってきますわよ〜！

「両手が右手のクソヤローに告げますわ〜！」

わたくしはカメラに顔を晒し、びしっと人差し指を突き立てます。

「いいですか？このカナリアの囀るようなお嬢様ボイスを糞まみれの耳の穴をかつぽじつてよく聞かがいいですわ〜！

下賤で愚かなお前にこの高貴なるわたくしが挑戦状を叩きつけますの！

両手が右手の男！いえ…きちんと指名して差し上げましょう。

J・ガイル！

何人もの麗らかな乙女を甚振った罪、わたくしが絶対に断罪して差し上げますわ〜！

チキン野郎でないのなら今すぐわたくしとタイマンしてください

まし！

エジプトカイロ在中！わたくしの名は」

ブツ！とここで棒が終わってしまいましたわ〜！

テレビ局スタッフも唾然！

でも関係ありませんので私そのまま帰りますの。

突然の名指しでJ・ガイルがすんなりブチ切れて出てくれればいいんですが。

まあ本当の狙いはJ・ガイルではなく両手が右手の男という情報を血眼で探すポルナレフなのですが。すぐではなくても彼なら必ずわたくしのもとへたどり着くはずですわよ〜！

その前にJ・ガイルに襲われるかもしれないませんがそのへんは賭けですわね。

アヴドウルのお店へ帰ると、その場でものすごく怒られた。鉄拳食らいそうになったぜ。

ああ、どうもテンションが高ぶるとオレの内なるお嬢様が…いや、外なるなのか？とにかくお嬢様が抑えられなくなるらしい。

「それで、当然両手が右手の男について詳しく教えてくれるだろうな」
「ええ。もちろん」

わたくしはアヴドウルにJ・ガイルについて知ってること全部を教ええましたわ。当然スタンド能力についても。

だってアヴドウルってJ・ガイルとホルホースに一回やられてるしな。今回もいたら厄介だ。まあホルホースがいつ頃DIOに雇われたか知らんけど。

「わたくしのジャステイスがこいつを殺せと囁いていますのよ!!」

「正義に突き動かされたとは思えない言動だな。しかし…なにも全国ネットで喧嘩を売ることもなかったらうに。せめて一言相談をだな」
「したら止められると思っただんですのよ」

「当然だ。裏稼業に勤む能力者が君を狙いに来るとは考えなかったのかね？」

「何も問題ありませんわよ。むしろそういうのを叩き潰しておきたいんですの」

「わたしが巻き込まれるのも込みで？」

アヴドウルの問いにオレはニヤツと笑う。

「ええ。もちろん」

「まったく君という人間は……」

「お嬢様ですので！……真面目な話、ですけれども。わたくし感じますのよ。ここから先に起きる不吉な出来事を！」

「わたしにとっては君が来たことが不吉な出来事の始まりだが……。奇遇だ。実はわたしも感じていたのだ。このエジプトに立ちこめる奇妙な気配を……」

アヴドウルは神妙な顔をします。さすが占い師、DIOの出現を感じ取っているのだろうか。

「嬢にも占いの修行の成果が出てきたということかもしれんな」

「ノンノン！違いますわよ！これはお嬢様の勘ってやつですわ」

「わたくしの完璧なRTA仕草をとくどご覧じろですわよ！」

さて、J・ガイルへの宣戦布告から3日、わたくしは街をウロウロウロウロして見つかるようにつとめていましたわ！…どうやったら脳内お嬢様を追い出せるんだろうか。

しかしそんな日々は突然終わった。

「おいアンタ」

と呼びかけられ、オレは振り向いた。1日5回はテレビで見た珍妙な人だ〜と話しかけられるので慣れっこだ。だが今回は違うぜ。

「両手が右手の男を探してる女か？」

「そうですわよ」

我々はこの男を知っている！いや！このまなざしとこの髪型を知っている！

そう、ポルナレフですわ〜！

「ちよつと話を聞かせてくれるか」

女の人には基本的にナンパな方かと思っていたんですがなんだか臨戦態勢ですわね〜！そりやそつか！ガハハハ！ずっと追っていた妹の仇の名前を知ってる上にテレビで宣戦布告なんてわたくしでしたら罠かと思えますわ〜！

わたくしは行きつけのカフェにポルナレフを半ば無理やり連れていきましたわ。ああ、カフェは嘘ですわ。遺跡発掘のときドーブに通った大衆食堂です。

「オレもあんたの追っている男をずっと追っている。…なぜ名前を知っている」

「お嬢様というのは残酷なことですわ」

「は？」

「わたくしに対するいかなる疑問もすべてがお嬢様であるから。という結論に至りますの。ですがお嬢様ではないあなたがたには決して

理解できない…。悲しき宿命ですわね」

「わかりやすく言えっ！」

「金ですわ。そういうアウトローたちから情報を集め続けたんですの。…動機については言うまでもありませんわよね？」

「…オレも同じことは試した。だが名前にたどり着くことはなかった…」

「それはわたくしがお嬢様だからですわ」

わたくしは運ばれてきたコーヒーにミルクをたっぷり入れて飲みほします。

「そんなことを聞くのは無駄ですよ。両手が右手の男を殺したいならわたくしについて詮索するよりも。わたくしの持つ情報について詮索すべきですわ。隠すつもりはございませんけど。仲間は多いほうがいい」

「あなたの言うことももつともかもしれない。しかし、なんていうかなアゝあなた胡散臭いとかそういう次元じゃない何かなんだよ」

「それ！それはわたくしがお嬢様だから！」

「つまりこのオレと手を組みたいと言うんだな」

「ええ。名指しの放送をした理由は、本気でJガイルを殺したいと思う誰かが来てくれないかという望みも込みだったんですの」

「おもしろい。協力しよう」

「話が早くて助かりますわゝ！」

「とでもいうと思ったか？」

「ガクーンッですわ!!ホワイ!?ワイ?!ワイオミングですの!!!」

「あんたがお嬢様なのは何回も言われてわかったぜ。だが単にお嬢様だから手を組もうっていうのはアホでも思わんだろうよ。あんたに両手が右手の男を倒せる力があると確信できたら、このジャン||ピエール・ポルナレフ。手を組もう」

ポルナレフは真剣な眼差しでわたくしを見つめる。なるほど、たしかにポルナレフってこんなやつだったかもしれない。

「いいですわ。だったらちようどいい相手がすぐそこにいますのよ」

「そこは直接闘う流れじゃあねーのか!？」

「それはファッキングバプレイですわ!!タイムロスですの!」
わたくしは立ち上がり、ポルナレフを外に連れ出します。
「わたくしの完璧なRTA仕草をとくどご覧じろですわよ!」

「最適化された超論理的な行動ですわー！ツ！！」

いや〜今日も街は愉快だな！ビジネス物乞いたちがこっそりラクスタ吸ってるぜ。ちなみにこういう奴らは金に物を言わせても意外と味方してくれない。むしろそういうやつほど警戒される。つまりオレはめっちゃ警戒されてるってわけですの。

ポルナレフはオレの後ろについて来ている。

「今からぶっ倒すのは折り紙つきの悪党なのでご安心なさいませ」

「待て待て待て。どうしてそう言い切れる？」

「わたくしをターゲットに暗殺依頼を出しましたの」

「はあ?!」

「わたくし、訳あって何人かを最速でぶっ倒す必要がございました。

J・ガイルの他に」

「どんな訳があったらそんなことになるんだ？」

「これも人命救助のためですわ。ガチのマジで」

わたくしはアヴドウルのお店に戻りますわ。しかしそこにアヴドウルは不在で、見慣れない人形が置いてありました。

「ああ〜こつちが先着ですわね」

「なんだ？ここはあんたの店？」

わたくしは人形を持ち上げてキッチンへ。買っておいた「誰でも簡単スノードームキット」のケースから取り出したドームにその人形をぶちこみ、別で用意した液体で満たします。

「なにやってるんだ」

「呪いのデーボってご存知ですか？アメリカインディアンの呪いをつかった暗殺をするという殺し屋なんですわ、彼がきているみたいですよわね」

「何ツ?!あんたの依頼を受けてか」

「ええ。複数人に出したんですが彼が一番ですの。さすが名前が売れているだけありますわね〜！」

「そいつはどこにいるんだよ？」

「じきに來ますわ」

呪いのデーボはまず本体がターゲットに一撃食らわせられる必要がある。その後置いといた人形に乗り移ってターゲットを殺すわけだ。なんて回りくどくてめんどくさいスタンド能力なんですよ！

「呪いのデーボスノードームの完成ですわ〜！」

「ゲテモン…。ってそれが呪いのデーボ？これはスタンドなのか？」

「まあそうといえばそうですわね」

チリンと鈴が鳴って誰かが店にやってきました。

「お前か？ターゲットのお嬢……………って何イーーーーー?! 一体何をしてやがるんだ?!」

呪いのデーボその人です。ウキウキでぶん殴られにきたら自分の乗り移る予定の人形がスノードームになっていたらこんなふうにもなりますわね!!

「貧乏臭い人形があつたのでキレイに飾って差上げましたのよ〜！」

「意味がわからない」

「意味がわからなくて結構ですわ〜！私もなにか意味があつてやつてるわけではございませんの。これもまたBecause…お嬢様ですわね」

「な…何がなんだかわからんが…！きさまの命もら」

「死になさいッ！」

わたくしはすかさずスノードームで殴りかかりましたわ。デーボが恨みのパワーを蓄積させるために避けないのは知ってますの！

わたくしこの時ばかりは、自分が半年以上体を鍛え続けてきたのを忘れていましたわ。しかも気合を入れすぎてスタンドパワーも上乘せでした。

それにスノードームのドーム部分を強化ガラスのものすごく硬いやつにしたのも忘れていましたの。ほら、人形が中からバコーンとガラスぶち破ってきたら嫌じゃないのですの？

まあつまり、水晶玉が頭蓋骨をちよつとやっちやいましたわ。

「ウゲエー……ッ！」

デーボはそう叫んで泡を吹きました。

「やべー！脳挫傷ですわ!!」

「さ、殺人じゃあねえか!!」

「まだ息はありますわよ。…それにいちいちスタンドを相手にするより本体を殺したほうが大幅にタイム縮小できますわよね！これはファインプレーですわ〜!!」

「オレにはあんたがサイコな殺人鬼にしか見えねえぞ！」

「ち、ちがいますのよ！ちがいますのよ！ほんとにこいつは殺し屋ですのよ！」

「まずい！このままじゃポルナレフ敵対ルートもありえるんじゃないか?!」

タイムを縮めることに気を取られて人間の気持ちを一切考えてなかったぜ。これもまたオレの脳がお嬢様に侵食されている証なのか？

「そうですね！わたくしの師匠がこの店の持ち主のアヴドウルがデーボの事知っていますの！とにかく彼を待ちましよう」

「あんた自分の店でもないのによくこんなに暴れられるな…」

「こいつがいつも通りこの人形に憑依してたらもつとめちやくちやになっっていましたわよ」

「なあ、それでアヴドウルってやつはいつ帰ってくるんだ？警察に見つかったらまずいんじゃないか？」

「そろそろですわよ」

そう言ってる早速誰かが店の前に来た気配がしましたわ。じやらじやらと玉すだれの音をさせて入ってきたのはアヴドウルですわ。

腕組みしているわたくし、多分狼狽えているポルナレフ、転がっているデーボの順でみて

「一体どういうことが説明してくれるか？」

と言いました。

わたくしは血痕を拭いた水晶玉をアヴドウルに向かって全力で投げました。

「食らえー！ですわッ！アヴドウル!!」

「なんでだよッ!!」

「これは最適化された超論理的な行動ですわーッ!!」

わたくしはラバーソールに椅子をぶん投げましたわ。イエローテンパランスがまたぶちやあつとはじけますの。でもわたくしはそんなのお構いなしに力任せに蹴りを入れ、ラバーソールを押し倒します。

「バアカめ!!このイエローテンパランス相手にインフアイトなどッ! あつとうまに養分だ!」

「だからウルツセエー!!ですわー!!」

「やめろーツ!!食い尽くされてしまうぞ!」

わたくしの体は一気にイエローテンパランスに飲み込まれますわ!しかし!

「なツ……なぜだ!イエローテンパランスが増殖しないだとツ!」

「そうですねよ!わたくしって食べないやつですのツ!」

そしてわたくしぶん殴りぶん殴りまくります。

わたくしのラツシュのダメージは肉に吸収されてしまいますわ。けれどもラバーソールはイエローテンパランスのダメージが通らないこととお嬢様にしては重めのラツシュに動揺してわたくしの真の狙いに気づいていないようでした。

ラバーソールの頭が少し浮いた!わたくしはスカートを翻し、ラバーソールの頭を包みましたわ!えっち!!いえ、お嬢様のスカートの中身は破廉恥ではなく夢と富と名声が詰まっていますわ…。

そしてスノードームの中身をどくどくとぶっかけます。濡れた布で窒息死させてやりますわよ!ついでに首も締め上げて差し上げましてよ!

「これがお嬢様絞殺術ですわーツ!!」

ラバーソールはなんかくぐもった悲鳴を上げました。しばらくジタバタ暴れてからくたつと動かなくなりましたわ。

私はスカートを持ち上げ彼の脈を確認します。

「死……んではないですわね!セーフ!」

「いろいろツツコみたいところはあるんだが…」

「本体が気絶したからこのウジュウジュの動きも止まったというだけですわ。増殖不足なこともあつて楽に倒せましたわね」

ツツコミを諦めてか、ポルナレフははあーつとため息を付きますの。すまんな。

「オレの腕はちよつと持っていてかれちまったがな。なんであんたに攻撃がきかなかつたんだ？」

「それも：Be cause I am O J O—S A M A：」

わたくしは両腕を広げてみせます。そこにはスタンド能力が出ているんですけどどうっかり長袖を着ていたもんだからただ優雅なポーズを取る人になってしまいましたわ！

お嬢様的には正解ですわね。

「スタンド能力についてはうかつに喋らない、とアヴドウルと約束してしましてよ。それに他の刺客に見られている危険も考えたらいま秘密を明かすのは得策ではありませんわ」

「まあもつともなご意見ってやつだな。：だが、なぜあんたはそんなふうで自分で殺し屋を呼び寄せている？狙いはJガイルとやらだけではないのか？」

「そうですね。わたくし、諸事情でRTAしていますの」

「あーるていーえーだア？」

「ええ。それにはかかせないチャートってやつですの。まあ詳しくは前前前話あたりを読んでみてくださいいな」

わたくしはラバーソールを拘束します。

「その男、どうするんだ」

「ですわね…殺すのも後味が悪いですし適当に床下に埋めて何年も生かし続けましょうか」

「吐き気を催す邪悪か？」

「なーんちゃって。お嬢様ジョーク、つまりはお嬢ークですわよ！」

「はっ？」

そんなこんなしているとアヴドウルが帰ってきましたわ。じゃらじゃらと玉すだれの音をさせて入ってききましたわ。

ラバーソールをダクトテープでぐるぐる巻にしているわたくし、多分狼狽えているポルナレフ、転がってるデーボの順でみて

「一体どういふことが説明してくれるか？」

と言いました。

わたくしはそばに転がっている水晶のでかい破片をアヴドウルに向かつて全力で投げました。

「食らえー！ですわッ！アヴドウル!!」

「デジャヴー！」

しかしアヴドウルはそれを一瞬で焼き尽くしますの。

「ほら！本物ならこれを行いますのよ！やはり私の論理的行動は正しかったんですわ！」

「いやいやいや…」

「お嬢、こちらは？」

「うーん…説明するとタイムロスですわ」

「そこはしてくれると助かるんだがね」

「あんた扱いになれてるな…」

なかなか崩し的にポルナレフとアヴドウルが出会って話がうまく進みそうですわね！やったー！

なあんてわたくしがのんきに両手を上げて喜んでたところで、視界に嫌なものが飛び込んできましたわ。

「ヤベエーぞー警察ですわ!？」

次回 わたくし、逮捕 ですよ?!

「だから！光ツ！！ですわ！」

わたくし…は…いや…オレは、警察に捕まった。デーボとラバーソール、二人に対する重度暴行罪で。もちろん正当防衛を訴えたが、殺し屋に自分の殺しの依頼を出している時点で何が正當なんだよ？と自問自答してしまった。

奇しくも承太郎と似たような状況に自らを陥れてしまったってわけさ。

どうやらオレの中のお嬢様はお嬢様力の発揮できる場所でないし勢力が弱まるらしい。牢屋に入れられて3日、オレはオレとしての自我を取り戻しつつあった。そういう意味ではここを出たくないかもしれない。

ガコオンと音を立て、牢屋の入り口から誰かが入ってきた。てつきり看守かと思っただがすぐに違うとわかった。

「お嬢、待たせてすまないな」

「あ、アヴドウルく〜」

「こちらが嬢太郎さん…であつてるかの？」

アヴドウルの後ろからスツ…とでできたのはダンディーなおじさま。いや、オレは彼の名前を知っている！だってもういかにもじやあないか！

「わしはジョセフ・ジョースター。アヴドウルの友人じゃ」

「やったぜ！アヴドウルでジョセフを釣った！」

「はじめまして、わたくしは某嬢嬢太郎ですわ！」

「太郎というのは男につける名前だと聞いておったんじやがのー…」

「偽名ですよ！オーツホツホツ！」

「出してもらえないのも納得じゃな」

「わたしもいい機会だからしばらくここで大人しくしてもらおうと思つたのですが、この調子ではわれわれも手の施しようがなくなつてしまいますからね。ジョースターさんのお手を煩わせて申し訳ないのですが…」

「なーに。スタンド使い絡みの揉め事と聞いた。わしもできるだけ情

報がほしい」

この物言いにジョセフはスタンド能力に目覚め、D I Oの出現についてなにかしら感知しているのかもしれない。

「安心したまえ、すでに手続きは済んでおる」

「話が早くて何よりですわ」

こうしてわたくしは数日ぶりのシャバの空気を吸えましたわ。逮捕されて数年ムシヨにぶち込まれる展開も一足お先にストーンオーシャンが始まるチートバグだったのかも知れませんが。

わたくしたちはカイロのちよつといいホテルに向かいましたわ。わたくしにシャワーと着替えを用意してくれてるらしいですわ！さすがジョセフ、お金持ち。わたくしと同じ力を持つもの！あくお嬢様パワーが復活していきますわ〜！

身なりを整えて指定されたカフェに行くと、そこにはジョセフ、アヴドウルともう一人。ポルナレフがいた。

「よお、出てこれてよかったじゃあねーの」

「当然ですわー！」

「その答えもサイコっぽいぜ…」

『両手とも右手の男』については彼からも聞いた。そしてお嬢さん。きみがスタンド能力を用いて悪事を働くものを成敗している、とも「そんなかんじですわー！」

「一つ確認したい。きみは生まれながらのスタンド使いなのだね？」

「そうですねよ！あなたは違いますのね！不思議ですわね！！なんかこう、先祖代々の因縁的なものでもありませんか？」

問答がめんどくさいのもう全部言いましたわ！こんな確認取る時点で察しのいい人間ならきつとわかりますわよ。アヴドウルとか。

「さすがアヴドウルの弟子といったところかの」

「占いは一切教えてないんですけどね」

まあとにかく、ジョセフとも知り合えたわけだし旅の同行者に入れてもらえるだろう。あとはポルナレフの妹の仇、Jガイルを倒すプランを練るだけだ！

いや、もう練るまでもないね。

なぜならホテルの入り口に吊り下がってるご立派なシャンデリアにガッツリとハングドマンが映ってるからね！

「なるほど、出待ちとは律儀ですわね！」

わたくしは走り出しましたわ！突然のダッシュに反応できたのは若いポルナレフだけでしたわ！

「本命が来ましたわよ！」

「まさか…Jガイルか！」

「簡単にヤツの能力を説明しますわ！光ッ！」

「……ッ！つまり……どういことだッ！」

「だから！光ッ!!ですわ！」

「わたくし、絶体絶命ですわーッ!!」

「だアからーきちんと説明しろって言ってんだ」

「あーもう！確かにこれじゃわかりませんわね！」

真のお嬢様は反省できますわ！っていうか今気づきましたわ。わたくし戦闘の血がたぎると思わずお嬢様言葉になっってしまうんですわね?!性根はバーサーカーお嬢様なんですの?なんちゅー人格してんねんと。

わたくしは全力疾走しながらポルナレフに要点を教えます。

「Jガイルのスタンドは……光なんですのよ！」

「カッチーンときた……」

「ああもう！いいから見ていなさいッ」

わたくしは後方へ指をさします。通りに並ぶ店のショーケースにきらりと光が反射し、Jガイルのスタンド、ハンドグロマンの姿が写ります。

「見えた。あれがJガイルのスタンドか」

「次は別の場所に反射しますわよ。町中では軌道は読めませんが、反射するものへと移動を繰り返し攻撃してきますわ！」

「反射…そうか、だから光か！」

「理解が早くて何よりですわ」

Jガイルの強みはそのスタンド能力がまるで「鏡の中を移動して追いかけてくる」ように見える点と、もし能力が看破されたとしてその速さ故に攻撃が避けがたい点だ。

だがこのままオレたちがやつとの攻撃を一発もくらわずに反射するものの少ない場所へ逃げたら流石にやつも不審に感じて追うのをやめるかもしれない。本体を探し出すのはタイムロスですわね！

「ここでスタンドをしとめてぶっ殺しますわよ、ポルナレフ」

「当然だ」

「ポルナレフ、わたくしは今回ディフェンスですわ。いや?受け…いや…ネコ…?というかあいつの狙いはわたくしですし」

「オレはオフエンスか？」

「あいつがわたくしを仕留めてくるタイミングであなたが一太刀入れてくださいませ。わたくし、今回はあえて混乱するふりをして一切攻撃を避けません」

「そんなこととして大丈夫なのか」

「捕食者が最も無防備になる瞬間は勝利を確信しトドメの一撃をユ一で食らわす時ですわ。ゴンもそう言ってましたし」

「そうじゃあなくって、あんた見かけはぱつと見一応か弱い乙女なんだけ」

「だからこそウキウキで攻撃してくるはずですわ」

「わかった。途中で死ぬんじやあねーぜ！嬢太郎とやらー！」

ポルナレフはわたくしと離れていきます。わたくしもしばらく走って立ち止まります。遮蔽物の少ないこの絶好のポイントで！

「大道路の交差点で！」

ブツブー！！クラクションが響き渡ります。しょうがないでしょう。ごみごみしていると相手の有利ですよ。

キラリ、と大通りの中心で立ち止まるわたくしたちに困惑した車列のどこからか光がきらめきましたの。

「来いッ！Jガイル」

わたくしの叫びに答えるかのように脚にズドンと衝撃が来てよけてしまいましたわ！ストッキングが破れてしまいましたの。

スタンド能力を発動していなかったらきつとぎっくり行ってましたわね！

そして息もつかせぬ第二撃がきますわ。脇腹にまた衝撃がきますの！あーもうブタ箱の飯を吐きそうですわ！

わたくしの能力は別に攻撃が全部無効になるわけじゃあございませんのよ!?!

それに当然攻撃の軌道なんて全然読めませんわ！スタープラチナだったら見えるんですの?!まったくわからん！

Jガイルの連撃にわたくしの服だけがどんどんズタボロになっていきます。

大渋滞の原因が道路の真ん中でどんどんはだけていく異常な光景ですわ！まずい、これではお嬢様としての尊厳っていうか乙女としての立場が揺らいでしまいますの！

「なにやってんですのよポルナレフっ……！」

すると横から突然軽トラが突っ込んできましたわ！わたくしは既のところまでスツ転がって避けませんが、危うく異世界転生してしまうところでしたの。

トラックはそのままわたくしにクラクション鳴らしまくってた乗用車につっこみましたわ。

そしてその軽トラのぶっ壊れたミラーにハングドマンの姿が写ります。

「攻撃が通らないスタンド能力、か。無敵だが、そのぶん攻撃手段がないと見える」

「無敵でなければ殺し屋の集合地点になろうなんて思いませんわよ」

「威勢よくしても無駄さ。大方お前がオレの攻撃をひきつけ、さっきの男が本体を探そうって魂胆だろうが不可能だ。オレのスタンド、ハングドマンの射程距離をなめてもらっては困るぜ」

ウオーー！またわたくしの服がバリバリ裂けましたわ!!ふざけんじゃあないですわよ！

「ぶさけんじゃあないですわよ！どすけべが！じゃああなた、どうやってわたくしを殺すつもりですの?」

「ああ、そんな簡単なことか。それは」

そこで爆音がしてわたくしの体がぶっ飛ばされましたわ大爆発ですの！

「閉じ込めるのさっ！こうやってな!!」

あくもうめちやくちやですのよ！大きな影が見えたと思ったらわたくしの体は爆発四散したトラックの荷台の下敷きですわよ！

大惨事を超えて死んでもおかしくないじゃありませんの！

「無敵のスタンド。聞こえはいいが攻撃してこないのを見るに、きさまの能力は防御と攻撃を同時に行えないッ！ゆえにその鉄塊はどか

「せまい」

「ッ……！そこまで考えていませんでしたわ!!」

「おまえがそこで能力を解いて甘んじて死を受け入れない限り、オレは民間人を殺し続ける」

「な、なんて卑怯な!」

「どう知ったかは知らないが、このオレの本名をテレビで撒き散らした罪だぜ」

「倫理か勝負かを天秤にかけようってわけですわね……。わたくし、絶体絶命ですわーッ!!」

「エジプト出禁、ですわよ！」

Jガイルの考察はじつは当たっていますわ。

わたくしのスタンド能力は絶対無敵ですが、同時に宇宙にふつとばされちゃった最強生物とか河底に沈んでるアイツくらいには何もできませんの！

いえ、ちゃんとした使い方をすれば多分普通に戦えますわ！でもとある事情でわたくし、どうしてもこのスタイルでないといけませんの。

けれどもさすがに民間人を殺されまくっちゃ目覚めが悪いですわ…ッ！

「おま……ちなさいっ……！」

わたくしの体はちよつとずつ炎に包まれていますわ！もう全裸を通り越して全焼でもおかしくないですが、なんとか大事なところは隠れているはずですわ…！ぎりぎり保たれたお嬢様としての矜持ッ…！

腕を使い、なんとか鉄塊をどかそうとします。車から出る黒煙で日は遮られ、人々の悲鳴が煙の向こうから聞こえてきます。爆発するぞー！という叫び声も。たしかにもう一段階ドカンと行きそうですわね。

「わたくし…はッ！ぶっちゃけおまえが何人レイプして殺してようがどーでもいいんですよ！」

Jガイルは目の前の鉄塊に写り、いやらしい笑みでわたくしを舐めるように見えています。炎はめらめら燃えてあたりを真っ赤に照らしています。大事故ですわねえー！ほんとに事故ってるのはきつとわたくし自身ですわ！

「ただ、何人もの命を踏みにじってるてめーがのうのうと生きてるのが気に食わねえー！ですわアーツ！！」

バガンという音がして私に覆いかぶさった鉄塊が《割れた》
「すわッ！」

わたくしが防御を解いたと思ったJガイルが狙うのは

「そう、お前みたいなのがス野郎は頸を狙うだろう！」

そして風が巻き起こります。燃え盛っていた炎は突如巻き起こる風でかきけされます。

そして煌めくのは！そう！あのアヴドウルの炎すら操るポルナレフのシルバー・チャリオッツの剣ですの！

ポルナレフの剣技に生じる真空状態の圧倒的破壊空間はまさに歯車的砂嵐の小宇宙！…もちろん真空は嘘ですわよ。

一閃、シルバー・チャリオッツの剣先が何かを切り裂いたようにみえましたわ！わたくしにはちよつとよく見えませんの。

ギャアーーッ！

どこからかかなり無様めの悲鳴が聞こえてきました。わたくしの首はもちろん無事ですわ！

「仕損じたッ…」

車の上からポルナレフがひよこつと現れましたわ！クツソ重いですわ!!

「悲鳴は近いですわ！必ず近くにいますの！」

わたくしもこのままJガイルを逃がすわけには行きませんの！

しかしクルマの下からはいでもとあたりはもうカオスでしたわ！救急車も入ってこれない大渋滞に大事故、You Tubeがあつたら急上昇間違い無しですわね！

「クツ…これでは…」

「一体何をしでかしたんじゃ！」

しかしここでジョセフとアヴドウルが登場ですわ！よくぞ追いついてくださいましたの！

「ジョセフ・ジョースターさんッ！あなたのスタンドの出番ですわ!!」

ジョセフのスタンドは発現したばかりのはず。DIOもJガイルもまだ知らないはずですわ！まあ更に言うならわたくしも知らないはずなんですけど!!そこら辺は勢いですのよ！

「この近辺に頸に切り傷を追った男がいるはずだ！かなりの重傷だぜ」

「わかった……できるかわからんが…『隠者の紫ッ』！」

ジョセフは携帯していたカメラをぶっ壊しましたわ。そこから出てきたのは通りを這いずるボロをまとった男の姿です。

「ここからほんの数本裏の通りです」

アヴドウルの言葉に反応しポルナレフは駆け出そうとして「どっちだ?!」と叫びます。アヴドウルが指を指す方向にわたくしも向かいます。

そしてついにJガイルを見つけましたわ。

探すまでもない、その傷は誰がどう見ても助からないほど深く、あたりは血まみれだった。

「一体誰なんだテメエーは…ッあのアバズレの用心棒か？クソツ…！」

「両手とも右手…間違いない。貴様が…オレの妹を殺した犯人か」

Jガイルはふてぶてしく笑う。醜悪なツラはみるみる血の気が失われている。致命傷だ。

「知らねエなあ。お前みたいなブ男の妹、わざわざこのおれが殺すかなア？ククク…」

ポルナレフはその男の右手をチャリオッツで突き刺した。Jガイルが悲鳴を上げると口からつばと血飛沫が混じった液体が溢れる。

「我が名はJ・P・ポルナレフ。我が妹の魂の名誉のために、この俺が貴様を絶望の淵へぶち込んでやる」

刹那、光が瞬く。そしてポルナレフの肩に傷が。Jガイル最後の悪あがきだ。しかしそんなことはポルナレフに関係ない。その程度の傷など彼の妹の受けた屈辱に比べれば。

『針串刺し』の刑だッ！」

チャリオッツの斬撃がJガイルをズタズタに切り裂いた。レイピアによる斬撃は彼の宣言通り、剣山のように肉体を貫いた。

「……終わった…」

ポルナレフはボソリと呟く。彼の青春をかけた復讐の旅路は終わった。

「感慨に耽つているところ申し訳ないのですが…」

わたくしはポルナレフの肩に手を置きましたわ。

「わたくしたち、逃げなきゃやばいですわ」

そう。交通渋滞を引き起こしさらには車列大爆発、加えてあからさまな他殺体、ストリップお嬢様。

わたくしたちには逮捕される要素しか揃っていないのですわ。

ポルナレフは周りを見渡してうーんと唸った。

「……………なるほど、こりや捕まるな…」

「これじゃあエジプト出禁、ですわよ！」

大胆なカットはお嬢様の特権ですよ。

結論から言うとうわたくしとポルナレフはエジプトから脱出しましたわ。

い…リーガルに！ですわ。お嬢様的にはリーガルですよ。

「それであんたがわざわざ自分に懸賞金をかけて殺し屋を叩きのめすのは、近い未来に現れるDIOという男の計画を阻止するため、と」

ポルナレフの言葉にわたくしは頷きます。わたくしたちはキプロス島のリゾートホテルでまったりしていますの。私のポケットマネーですわね。

アヴドウルとジョセフが合流するまでつかの間のバカンスですよ。

「ですわ。っていうかもうDIOは現れていますの。姿を隠してるだけですよ」

「んんん？でもよオ…今ぶちのめしてもまた別のやつが利用されるんじゃないやあねーの？」

は？

オレはぼかんとした顔をした。いわれてみればたしかに。

「ゴツ…ここからぶちのめすやつらは金で動くスタンド使い…DIOはそういう人間を利用するので、手駒をゼー…んぶぶつころすの！」

「だがなぜその未来を知っている？」

「あー。それはわたくしのスタンド能力ですわよ」

「あんたの能力は攻撃の無効化だろ？スタンド能力は一人につき一つ…矛盾してるぜ」

「矛盾していませんわ。わたくしは未来人ですよ」

オレの能力は今はまだ誰にも明かしたくない。だから適度に説得力のある嘘を考えてきたのだ！

「はあ?!」

「未来から来たんですよ。だから《過去》から攻撃を受けても、未来に追いつかれる前に敵を倒して帳尻合わせすれば傷をなかつたことにできるんですよ」

うん。それっぽいぜ！だがポルナレフはしつくりきてないようだった。

「あ……ああ？SF映画の話か？」

「つまり、未来永劫わたくしの勝利は確定してるということですよ！」

「嘘くせーなあ……」

わたくしは疑うポルナレフを置いてプールサイドからダイブしましたわ。ホテルマンっぽい人に怒られましたわ。

さて、RTAと称しておきながら、全然早くない気がしますわね。まあホリイさんにスタンドが発現してからが計測スタートとはいえ、このままじゃ完走まで何話かかるんですのよ？

だってわたくしがこのあとやることは悪党の攻撃を受け続けて正面から殴る、それだけですの。あとパイロット訓練。トツプガンですわよ。

思うんですのよ。

あのエジプトへの旅路攻略のコツはジョセフ・ジョースターに飛行機を運転させないことなのは、と。まあはじめの飛行機はどうしようもありませんけどね。

そして次に、移動手段ですが……遅いですわ。飛行機が無理なら仕方のないことですが……遅い、とにかく遅いのですの！

そういうわけで、その日が来たらわたくしが最速の移動手段を用意いたしますわ。

「それで、殺し屋殺しをしすぎてエジプトから出禁を受けている君は、とある日本人観光客を救いたいがためにエジプトに密入国した後失敗して帰ってきた……と」

「わかりやすい説明ゼリフですわね〜！さすがアヴドウルさんですわ」

わたくしはDIOと遭遇したアヴドウルが避難しているインドの

とある一軒家にいますわ！Jガイルを倒してエジプト脱出してからざつと四ヶ月たってますわよ！わたくしの脳内はすっかりお嬢様ですわ！どうしてこうなったってそりゃこの4ヶ月はお嬢様テンション爆上がりなハイな日常を過ごしてきたからですわねー！

アウドウルはチャイを飲んでますわ。隠れ家だつていうのにお茶入れる道具だの凝った茶菓子だの民芸品だのが揃っていますの。

なんかこの人、外見はいかつかつて粗野な印象を受けますがどこか教養と品をかんじますわね。わたくしと逆ですわ〜！

「DIOはエジプトから動いていない、これは間違いありませんわ！遭遇できなかったのは残念ですが、まあどうせそのうち戦うことになる。そうですわよね？」

「ああ。そうなるだろう」

ネタバレでもなんでもないが、オレが助けようとしていたのは花京院だ。夏休みにエジプトでDIOに肉の芽を埋められたとか言ってたからな。だがまあ、普通に見つけられないどころかオレは未だに指名手配されていて、しかもこのお嬢様オーラはどう足掻いても隠せないときたもんだ。ほとんど警察との追いかけっ子で終わったぜ。

「因縁の敵…と言っていたが…、はじめは信じられなかった。やつと直接会うまでは」

「ほんとエジプト出禁は痛手でしたわ。わたくしがいればワンチャン師弟タッグでボコボコでしたわよ！」

「お嬢といえどやつあの雰囲気。度し難いものがあった。このわたしでさえうっかり悪へ踏み入ってしまうようなそんな魔力すら感じた」

「オーツホツホツホツ！わたくしには悪への誘惑など無意味ですわ！なぜなら通俗的な正義の概念を持ち合わせておりませんので！」

「それは自慢げに言うことではないな…」

さて、あとはもう空条承太郎の収監、ジョースターからの呼び出し

を待つのみですわね。この待ちは勿論カットして差し上げてよ。
見せてあげますわ。誰も追いつけないわたくしのエジプトへの最
短ルート！

ご安心くださいませ。

大胆なカットはお嬢様の特権ですよ。

計測開始！

旅はこれから始まるのですわ！

幽波紋。生命エネルギーが作り出すパワーある像ーヴィジョンー。
D I O。ジョナサン・ジョースターの肉体を乗っ取った因縁の相手。

空条承太郎にとって、突然告げられたそれらの事実はどこか絵空事
のようであり、傍らに佇む自身の幽波紋もなにか特別なものというよ
りはずっと自分に生えていた手足の延長のような。知っているもの
に色がついたような。これまで感じていたものに実は名前があつた
のだというような奇妙な感覚だった。

そして、花京院典明。

この転校生が突如として襲いかかり、『D I O』の刺客だと言われぶ
ちのめしても。その額から気味の悪い肉の芽を引き抜いたときも、承
太郎には一切迷いや躊躇い、動揺はなかった。

しかし自分の母親、ホリイ・ジョースターがスタンド能力に蝕まれ
倒れた時。承太郎ははじめて自分の中の何かが揺さぶられたような
気がした。

D I Oを殺し、その呪縛を解く。

星の白金と名付けられたそのスタンド能力と仲間とともに、承太郎
のエジプトへの旅は始まろうとしていた。

「ってわけですわね……」

なーんてことをわたくし考えましたわよ！合ってるかは知りませ
んわ！

「……なんだ、この女は」

「オーツホツホツホツ！大胆なカットはお嬢様の特権ですわ!!わたく
し、ちよつと遅刻したけど登場！参上ですわ！エジプトへはわたくし

も同行しますわ〜！」

いぎエジプトへ！つて時に突然やってきたお嬢様にポーカーフェイスの承太郎も多少動揺しているようですわね。結構結構。人間っていうのはファーストインパクト…じゃなかった、第一印象で今後の関係が左右されますからね。多少かましておくべきですわ〜！

「お嬢、やっと来たか」

アヴドウルはちよつと呆れてますわね。まあ本当ならジョセフとアヴドウルと一緒に日本入りするはずでしたから。

「アヴドウルさんのお知り合いでしたか」

「彼女は嬢太郎。わしの知り合いでもあり、同じくDIOを追うものじゃ」

花京院の間にジョセフが答えてくれますわ。コミュ強おじいちゃん最高ですわね！

「嬢太郎だ…？」

「お嬢様太郎で嬢太郎と申しますわ!!以後お見知りおきを！ですわ〜！」

「ふざけてるのか」

まさかの名前かぶりに承太郎はピキツてるんですの？困ってるんですの？どっちも違う気がしますわね。

「フザケてませんわよ。わたくしガチのマジ。事情も全部お聞きしました。40日なんて悠長なこと言わず日帰り旅行並みの感覚でこの旅を終わらせて差し上げますわ」

「彼女は一見イカれているが戦いへの勘と身元は確かじゃよ」

「とてもそうは見えませんが…」

「わたくしがイカれていない証拠をお出ししてあげますわ！」

わたくしはジョセフの持っている飛行機のチケットをひったくります。そしてビリーツと破り捨てますわ！

「何をするんじゃあ?!」

「こんなの襲撃されるに決まっていますわよ！おバカ！」

「しかしならばどうエジプトへ向かう？」

「飛行機ですわよ！」

「おいジジイ、この女はイカれてる」

「ノンノン！ 自家用ジェットですわよ！ だから遅刻しちやっただんですの」

わたくしは自分の乗ってきた車を指さしますわ。

「とにかくお乗りくださいまし。話は車の中でもできますわ」

まあわたくしの乗ってきた車つてリムジンとかベンツとかそういうのじゃなくていすゞのトラックですわ。いすゞのトラック。なんで？ 日本で目立たないかと思って…。

助手席にはジョセフに乗ってもらいましたわ。残りは後ろです。私4人ならギウギウでなんとか行けたかもですけど、屈強な男だとさすがに無理ですわよ。

「ところでさっきの飛行機に空きができていたら結局不自然に思われるんじゃないかの」

「そこらへんは大丈夫ですわ。替え玉を用意しましたの。数は足りませんが、時間稼ぎにはなりますわよ」

「その替え玉とやらは信頼できるのか？」

「できませんわ。けどお金である程度は言う事聞いてくれますし…：なにより、ほんのちよつとの時間稼ぎで十分ですわよ」

ついたのは横田基地ですわ！ これまで特に必要がないから言ってもませんでしたけどわたくしってアメリカ人ですので問題ありません。

「そういうわけで我々が今回エジプトまでの旅で使うのはツポレフ

T u r 1 4 4、超音速輸送機ですわ！」

名前がポルナレフに似てていいですわよね！

「超音速輸送機だア？！ しかも十年前に製造終了したソ連製の古い機体…」

「あらーよく知ってますわね！ クソ速い飛行機探してたから丁度これが闇に流れてたんですよ。おんそくだから絶対めっちゃくちゃに速いに決まっていますわよ」

「なんだっていい。お前これ動かせるのか？」

「ええ！訓練も受けましたわ。ご安心遊ばせ」

「エジプトまでこれでいくのか？」

「いいえ。航行距離は6300kmが目安のようですが…どこまで飛ぶかはまあ内緒にしておきましょう。情報が漏れたらせつかくの爆速チャートがガバってしまいますわ」

「で、これは音速なんだな？」

「ええ！マッハ2までだせますわよ。なので3時間もあれば中東ですわよ。多分」

「多分だ…？」

「こんなやさすがに飛ばしたことはありませんわよ。墜落したら飛行時間は永遠になっちゃいますわね！まあでも多分大丈夫ですわよ」

「おいジジイ、アヴドウル。本当にこいつに任せていいんだな」

「民間の飛行機で行くよりかははるかに安全じゃろう。それにたしかお嬢は半年以上訓練を受けているはずじゃ」

「一体どこでそんなコネクションが…」

「オーツホツホツホツ！これもB e c a u s e…お嬢様、つてやつですわ〜！」

「音速の飛行機ならば追手は追いつけない。理屈では理解できるが無事に飛行機を降りられるのか…」

「あら？じゃあゆつくりまったり民間機に乗って墜落させられてお猿の蒸気船に乗って漂流して煽り運転でも喰らうつもりですか？なら止めませんわよ。空条ホリイさんが苦しもうと気にしないと言うなら」

「リスクを取るしかない…か」

「繰り返しになるが、お嬢はこんなだがわたしの信頼しているスタンド使いの一人だ。承太郎」

「……………わかった。アヴドウル、お前を信用しよう」

くそ〜！高校生二人からの好感度はやや低ですわね！やっぱりわたくしの味方はアヴドウルだけですわ！

でも突如現れたお嬢様に対して不信心を持つのはあたりまえです

わよね。よく考えると。アヴドウル、あなたどうしてわたくしを信頼
してくれてるんですの？弟子にとつてくれたんですの？！
まあいつか！ですわ。旅はこれから始まるのですわ！

「イエス！マツハ！マツハゴーゴー！マツハサイ
コー！エンジンゼンカイ！」

同時刻、千葉県成田市、成田国際空港。バンコク行航空便発着口
ビーにて。

ジョセフ・ジョースターは旅券をはたはたと振り、落ち着かない様
子で点滅する電光掲示板を見ていた。傍らには金髪くるくるカラー
のかつらを被り、瀟洒なドレスを纏った少年がいた。

「お……お……お兄ちゃん……ボクこれイヤだよ……」

「こら、ボインゴ。お前は喋るんじゃないやあねえ。バレちまうだろ」

ボロい仕事だ。金持ちの身代わりに飛行機に乗って、あとはフケち
まっでいい。それだけでけっこうな金になる。クヌム神の暗示を持
つスタンドを使えば空港警備員だって、赤の他人が出入国してようが
絶対に気づかない。

「ボインゴ、妙な予言はでてねえよな？」

「うん、お兄ちゃん」

ボインゴはこくこくと頷く。予言を記す本、トト神のスタンドを
ぎゅっと抱きしめている。

「にしてもなんで金髪のかつらに女装なんてオーダーを出したんだろ
うな？」

「わ、わかんないけど……嫌な予感がする」

「予言は出てねーんだろ？」

「出てはないけど……」

「バンコクついたらばあーつとやろうぜ。ボインゴ、物価も安いし
よオー女と酒、ついでにプールにでも入ってゆっくり過ごそうや」

「う、うん！た、た、楽しみ……！」

ロビーにバンコク行き飛行機の搭乗開始アナウンスが響いた。二
人は意気揚々と立ち上がり、タワーオブグレーの待つ飛行機に乗り込
むのであった……

一方その頃…。

「マツハゴーゴー！マツハゴーゴーですわ！ガハハハハ！」

と、わたくしは高笑いしながらインドの金持ちに乗ってきた超音速輸送機を売り払うトークをしていましたわ。ここはインドのゴアですわ〜！

ゴア州は長らくポルトガルの植民地として発展してきた場所で、そりやもうずっと栄えていた都市ですわよ。ですがインドに併合されたのは十年ほど前、州として成立したのもつい一年前と言うフレッシュユなのか伝統的なのかよくわからん場所ですわね！

わたくしの…：オレの！オレの記憶だとゴアはヒツピーの聖地だつて聞いてたが、街中で大麻の香りとかはあんまりしない。

まあこの鉄鉱石の採掘で設けたらしい金持ちインド人からはプリンするけどな。

ちなみにマツハできたので日本を経ってからまだ四時間もたっていない。さすがのDIOもまだ人の手配が済んでないだろう。

「イエス！マツハ！マツハゴーゴー！マツハサイコー！エンジンゼンカイ！」

というわけでツポレフ Tu-144の売却には成功した。まあもともとこの輸送機を譲る条件であるものを入れる取引だったんだから揉められちゃあ困るぜ。

「済んだのか？」

と応接スペースで固まるジョースター一行。ジョセフとアヴドウルはしつくりくるが承太郎と花京院は浮いている。ほんとになんてこいつらずっと学生服なんだろう…。

「完璧ですわよ〜！」

「ではいつ出発です？」

「そうですわねえ…待ち合わせまで少しありますし準備もありますので三時間ほどお待ちいただけます？」

「そうじゃのお。食料の買い足しもおきたかったからちようどいい」

「三時間か…観光するには短いし、ぼくはここでゆっくりしていようかな」

「買い出し組とお留守番組で別れそうですね。わたくしは当然買い出し組ですわ。」

「オイ、今待ち合わせとிட்டが誰かこの旅に合流するの？」

「うむ。わしとアヴドウルとも共通の知人じゃよ」

「すわ〜」

「承太郎、旅が始まってまだたったの4時間じゃ」

「ですわよ。本来なら二週間くらいかかる道のりですよ！」

「二週間？どこからでた数字だ？」

「とにかく三時間後に集合ですわ」

「というわけでわたくしと承太郎とジョセフは買い出し、アヴドウルと花京院はお留守番と相成りましたわ。わたくしたち買い出しグループは嬢、承、ジョでジョジョの奇妙なお買い物って感じですよわねえ！」

「オホホホ!!」

「自分で考えたギャグで笑ってしまった。ジョセフは多分大丈夫だが承太郎はどう思ってるんだか…。」

「承太郎、おまえはお嬢と食料を買ってきてくれ。保存の効く缶詰や水なんかを人数分。念の為3日分」

「おれ一人で十分だ」

「これを期にお嬢とも少し打ち解けてくれんか。たしかに奇妙なお嬢様だが、信頼の置けるスタンド使いじゃ」

「承太郎はため息をしてぼそっとつぶやく。」

「やかましい女は嫌いなんでね」

「お嬢はそれが聞こえてないようでホッホッホと笑ってどこから出したかわからない羽つきの扇子で自分を扇いでいた。」

「そうですねよ。わたくしツルハシより重いもの持ったことありませんし、助かりますわ！」

「早く買って帰るぞ。あんたの見立てでは手下はいないようだが、安心はできない」

「ですわね。空路から外れても即敵を送り込んでくるような奴らですわ。もう嗅ぎつけてるかもしれない…。燃料補給をしてもう一度マツハゴーゴーできればそれが一番だったのですけどね…。着陸できる場所がありませんの」

お嬢の思いの外真剣で冷静な答えに承太郎は驚く。登場から今でふざけ通してるように見えたからだ。しかし音速航空機を飛ばしていくなんて荒唐無稽なことを実現し、母の命を救う旅に大いに貢献しているのは確かだ。行いだけ見れば彼女は十分自分たちに貢献してくれている。

「ま。今来たところで承太郎さんと私がいればジョジョジョジョですわ。楽勝ですわよ！オーツホツホツ！」

行いだけ見れば。

「ここからの交通手段はなんだ？」

「船ですわよ。ここからアラブ首長国連邦まで海を通りますの」

「逃げ場のない海で敵に襲われたらまずいんじゃないか」

「あら。それは敵も同じですわよ。ご安心なさって！まあヤバそうなのはもう事前にボコしておきましたわ。全員！40日じゃまだベツドから起き上がれないでしょう！」

「おかしな話だな。おまえが襲ってくる奴らを知っているなんて」

ギクウーと音が聞こえた気がした。

「んえ?!んー…んー…!!」

お嬢は突然慌てる。それでもにやもにやとなにかいったあとにやけに神妙な顔で言った。

「…そのう…わたくし、殺し屋殺しなんですのよ」

「殺し屋殺し？」

「ええ。スタンドで悪さしてる連中をボコボコにするのが趣味で、そのまま仕事にしたんですわ！うん？まあ…そんなわけでやべー奴らはだいたい宿敵なんですのっ！」

「なるほど」

やはり不自然だ。情報に通じている…というよりも、まるで何もかも知ってて対策しているようだった。全幅の信頼はまだ置けないと承太郎は考え直した。

そして買い物を終えて帰ると、船の用意はもうできており、無事に待ち合わせ相手も到着していた。

「おー！お嬢!!」

「ポルナレフーツ!!」

そう、あの電信柱みてーな頭の男がやっと合流したのだ！

「やれやれ、また新たな旅の同行者…か」

「いやしんぼですわね♡」

「オレはジャン・ピエール・ポルナレフ。よろしくな」

ポルナレフはさすがだった。乗船までの数十分でもう花京院や承太郎と打ち解けていた。格好の奇抜さではどっこいどころか、オレのお嬢様スタイルのほうが常識的だと思うのだが、問題はそこではないらしい。

わたくしだって負けてられませんわ！オツホン、と咳払いしてポルナレフに話しかけます。

「ポルナレフ。彼はどうでした？暴れませんでした？」

「ああ、暴れはしなかったが、途中襲われた。そのせいで機嫌悪くなってホント苦労したぜ、二度とゴメンだ。まあ今は機嫌良さそうだな」「え？襲われたんですの？」

「ああ、なんかきもちわりー魚人間みたいなスタンドだったぜ。スクリューに巻き込まれて死んだ」

「あら〜……」

それってもしかしてダークブルームーンさんでは？しれっと撃退してるんですね…。早めに味方につけてよかったですわ…。

「機嫌がいいのはよかったですわね。最速でもつくのに一日はかかりますもの。その間ずっとへそを曲げられたら困りますわ」

「彼？もう一人いるんですか？」

「まあもう一匹ですわね」

「動物か…」

ええもうとっても可愛い動物ですよ。

わたくしはにっこり花京院に笑いかけます。花京院は少し微笑んで会釈してくれますが、やっぱりまだまだ心の距離が遠いですわね。パンツ丸見えのハンドサインをやるくらい仲良くなりたいですけど

さて、わたくしたちは船に乗り込みそれぞれ船室に荷物を起きまします。大きさは劣るもののタイタニック顔負けの豪華客船ですわよ。

お嬢様にはお嬢様に相応しい乗り物というのがございます。その

一つが豪華客船ですよ。

「乗組員はいないんですか？」

と花京院。さつきから質問が多いですわね。

「うむ。乗組員に敵が紛れ込むのを避けるためだ。部外者が増えるだけリスクが増える」

「でもたった一人の船員もなしに…」

アヴドウルが言うも花京院はまだちよつと心配しているようですわね。まあ気持ちはわかりますわ。でもこれだけ大きい船でも3人いれば動かせるらしいですわよ。

3人でできるならワンオペでもできるツ!!わたくしの魂がブラツク企業みたいなことを叫んでいますわ。

汽笛がなり、船が動き始めました。

「そうですわ!船長に挨拶しに行きましょうか」

「わしも行こう」

「ぼくも行って構いませんか？」

「構わんが…:…だろう、少々イヤな思いをするかもしれんが…」

「まあいいんじゃないですか?短い旅ですし」

わたくしとジョセフ、花京院は船長室へ向かいます。分厚い扉をあけると中には

「ウホウツホー!!!」

「ワー…ツ?!」

デカめのオランウータンがいますわよ!!

「あつら〜フオーエバー船長!どうしたんですの?バナナが食べたんですのオ〜?」

「グフオ…:…!フオ…:…!」

「卑しいお猿ちゃん♡何本食べたいんですの?バナナ何本食べたいのオ〜?」

「ウホ!!ウホ!!」

「3本?ぶつといの3本欲しいんですの?3本…いやしんぼですわね♡」

オランウータンことフオーエバー船長はバナナを貪り食います。

船長さんの服もちゃんときてて可愛らしいですわ〜!

「なんですか…これは」

「船長じゃ」

「ジョースターさん、あなたまでふぎけてるんですか」

「ふぎけてなんかおらんよ。この船自体がこのフォーエバー船長のスタンド、ストレンジスじゃ」

「ス…：スタンド?!この船そのものが?」

「ええ。もとはボロっちい小船ですけどね。でもそんなのお嬢様には釣り合わないでしょう?だから豪華客船になるようにちよつと教育したんですよ」

更にいうとストレンジスはボロけた貨物船だったのですが、それもお嬢様らしくありませんわよね。しばき倒して優しくしたあとしばき倒してようやく豪華客船にアップグレードできたんですの。これが一番大変だったかもしれないわ…。

とはいえストレンジスだったからこそ途中襲ってきたダークブルームーンを撃退できたのでしよう。船のまわりで暴れたってストレンジスの手のひらの上をくすぐってるようなものですわ。

名乗る暇なくスクリューに巻き込まれて可哀想ですけど、船自体がスタンドなんて普通思いつきませんもの。運が悪かったですわね。

DI Oより先に彼を見つけてられてラッキーでしたわ。

スタンドを操る動物を見つけるのはそこまで苦労しませんわ。奇妙な出来事を見つけたたびにどんどん暴いて行って人間のスタンド使いが出てこなかったらそれですの。

捕まえるのは苦労しましたけど、所詮こいつは船だけの一発屋ですわ。陸上でしばけば余裕でしたわよ。バーカ!

「しかしなるほど…船のスタンドか…。これなら海上で襲われてもむしろこちらが優位」

「その通りじゃ。船長は少なくともお嬢には従順だから心配いらん」

「これほど強いスタンドを持つ猿を手懐けるなんて…」

感心しそうになってるところ悪いですけどフォーエバー船長がわたくしに従順なのはわたくしが眉目秀麗なお嬢様だからなのですわ

よ。もつというとなりの子だからですわ。

あ！フォーエバー船長が物欲しそうにわたくしに欲望で穢れた眼差しを向けていますわ!!

「フォーエバー船長、ご褒美のパンチラですわよ〜」

「ウツホ!!ウツホウツホ!!ウツウツ〜!!」

「……」

そういうわけで、オレたちは楽勝でアラブ首長国連邦までたどり着くってわけ。やっとでてこれた。

いや〜楽勝だなくこのまま敵に合わずしてエジプトまでついちまうなあ!

そう思つて翌朝、目を覚ますと。

港が霧に包まれていた。

「ギイツクウウツ!!!ですわ」

「霧……?」

目の前の港に広がる白を通り越して灰色に澱んだ霧を見て一同皆首を傾げた。乾燥した地域でも朝方海のそばでは霧が発生することもある。

しかしこんなに濃くて禍々しい霧は初めて見た。

はじめてみた、がすぐにわかりましたわ。

「ジャステイス……」

「ひどい霧じゃのお…船はつけそうか?」

「そうですね。船長の腕なら大丈夫ですわ」

「それにしても、こんな霧は見たことがない…」

アヴドウルは少し警戒していますわね。さすが占い師ですわ!

「この港以外じゃ駄目なのか?なんか不気味で降りたくないぜ」

「いや、この港に陸路用の車が手配されている」

「そもそもジジイ、なぜエジプトに直接行かないんだ。わざわざ陸に上がるのはタイムロスとやらなんじゃないのか」

「そうですね。ソマリ海域まで下って紅海を上がる方が早いんじゃない?」

「それは……だな……」

ジヨセフはわたくしとポルナレフの方をちらつと見ます。

ええ。わたくしたちエジプト出禁ですの。故に港で見つかろうもんなら問答無用で射殺されますわ。花京院を助けるために入国したときはもう本当に、空港が火の海になりかけたんですからね。

「密入国のしやすさですわ。それ以外に理由がありませんか?否…ないですわよね!!」

わたくしの有無を言わせぬ断言口調(大声)で船内は一度しんと静まり返りました。そしてタイミングよく、船が止まります。

なんだか降りる雰囲気にしてしまいましたか、本当にみんなおろしていいんですか?ここでこの立ち込める霧が敵のスタンドだと警告し、わたくしだけ降りたほうがいいのでは?

「ちよつと待った!!」

いや待てよ!!ここでこれが敵のエンヤってやつのレストランテイスでみなさんこの霧の中に出たらちよつとした傷でも体に乗っ取られて大変なことになりましたよ!!なんて言ったらいいよオレか怪しまれるのではないか?

つまりオレ一人でやつを倒しに行くのが最適解…ッ!

「今度は何じゃ?」

「みなさんは船に残っていてください。わたくしが車とつてきますから」

「はあ?」

「霧で視界も悪いですしね?ウンウン!そうしましょう!」

「お嬢一人で行かせるのも心配じゃのー!」

「私が同行しましょう」

とアヴドウル。心配してくれるなんて…優しい…トウंक…じゃなくってえ…。わたくしこの隙にエンヤ婆を倒しに行っちゃいたいのですけど!

「ああ、アヴドウルがいるなら安心じゃ。ではよろしく頼む」

「う、うーん…わかりましたわ…」

流石に不自然になるため断ることもできず、わたくしは渋々アヴドウルと船外に出ます。

あゝ嫌な霧々確実にエンヤ婆が待ち構えていますわ。

でもここで降りなきやいけない理由は怪しまれる以外にもう一つ、ありますの。

この霧の下で苦しんでいるであろう巻き込まれている一般市民を絶対に放っておけませんわ。

「ノブレスオブリージュ…いえ、これは単なる正義、ですわね…」

「どうした急に」

アヴドウルとお嬢様を送り出したジョセフ、承太郎、花京院、ポルナレフはデッキに出ておぼろげな二人の影を目で追った。

「やれやれ…まだこの船に缶詰か」

「スタンドって思うとちよつと落ち着かねーよなア…」

ポルナレフは特に、あのフォーエバー船長の変態的側面を知っているからなおさらだった。普通女性は露骨に性的なアピールをするものを（しかもそれがオランウータン）避けると思うのだが、お嬢様はむしろそれを利用していた。

しばらくお嬢様とともに行動してて思うのは、彼女は本当にお嬢様なのか？ということだった。

「霧も相まって不気味ですね」

「あの二人は車に辿り着けるのか？」

「アヴドウルがおれば大丈夫じゃろう」

ジョセフはくぁーとあくびをして伸びをする。そういえば起きてから何も食べていない。これから車で移動するということとはちゃんとした料理を作って食べれる最後のチャンスだ。

「腹が減ったのう…なにか作るか。お前たちも」

「おっ！いいじゃあないの。オレの故郷の朝食ご馳走しちゃうよオくん」

「それはありがたい」

ポルナレフとジョセフはキッチンへ。承太郎と花京院は船外の見えるリラクゼーションルームも兼ねたホールで待つことにした。

展望スペースはすべてガラス張りになっているが一面真っ白で何も見えなくなっていた。

「ステイブン・キングの霧のようだ」

「あれは確か霧の中に怪物がいるんだったか…」

「ああ、少し不謹慎だったかな」

「いや…お嬢の方は知らねーが、アヴドウルがいれば問題ないだろう」

「君は彼女のスタンド能力を知っているのか？」

「さあな。名前すら聞いたことがねえ」

「…まあジョースターさんの言う通り。アヴドウルさんがいれば大丈夫か」

そんな感じの雑談をしていると、霧の向こうに揺らめく影が見えた気がした。花京院がまず気付いたが、それを言葉にしようとした瞬間

にガラスにバン！と掌が叩きつけられた。

「助けて!!」

それは老婆を背負った男だった。

「お嬢、わたしになにか言うことがあるんじゃないかね」

「な、なんですの急に」

霧で前が全く見えない中そういう発言をされると心臓に悪いぜ。オレの動揺なんてアヴドウルにはお見通しなんだろうな。生体探知機と化した炎がゆらりと揺れた。

「君の正体のことだ」

「なななななんですのそそそそんなしよしよしよ正体とか」

「動揺がわかりやすい」

「傷つきますわね、アヴドウル…。わたくしたち2年も師弟として過ごした仲間じゃありませんの。さながらウィング先生とズシみたいな」
「その二人は知らないが。勘違いしないでほしいが、確かにわたしは君という人間を信頼している。ただ君はどうかかな」

「何が言いたいんですの?」

「君は大切なことをわたしたちに打ち明けていないんじゃないかね」

「ギイックウウツ!!!ですわ」

「そんなにわかりやすいことがあるか」

なるほど、たしかにわたくしがアヴドウルを信用していないというのは的を射た発言ですわ。ぐ指摘ありがとうございます。

けれども「じつはジョジョの奇妙な冒険で漫画でこれから先に起こること全部知ってたんですわ〜!だからRTAしてるんですの☆オツホツホツホツ!」と言って誰がハイソーデスカって納得できるんだよ?!

「なんて説明すればいいのやら…困りましたわね」

でも。

もしかしてアヴドウルなら…。

そう思った矢先、突如コンテナの影から何かがぬうつと現れましたわ!

「すわー！ーッ?!?!」

「わたくしはすかさずアツパーを叩き込みます！」

「なっ……」

アヴドウルは驚き息を呑みます。ん？吐いてる？まあどっちでもいいか。

どきりと地面に倒れ込んだのは港の作業員といった出で立ちの男です。ピクリとも動きませんわ！

「わたくしついにばんぴーを殺してしまいましたの?!」

「いや……この男、わたしの生体探知にひっかからなかった」

アヴドウルは男をひっくり返します。すると

「頬に穴が空いている！それにこの顔、恐怖によって死んでしまったかのような形相は……！」

「アヴドウルッ……！お下がり遊ばし！」

男の手がぬるりと音も建てずにアヴドウルの足へ向かって伸びていました。わたくしは慌ててアヴドウルの首根っこを掴んで引き離します。

どう見ても死んでいるはずのその男はゆっくりと立ち上がりました。

「ウアア……」

「これじゃミストじゃなくてナイトオブザリビングデッドですわね」

「まったく、この旅はじめての敵が動く死体とは」

しかもかなり悪いことに死体を倒してもまるで意味がない。さらに一番危惧していた事態、港の人々の巻き添えまで起こっている。

タイムはともかく、これじゃスコアにマイナス補正がかかってしまいますわ！

「船に戻るか？」

「……いえ、予定通り車まで行きますわ。だってアヴドウル、あなたの炎ならまあ正直全然怖くないですわよね」

「ああ」

だからあなた退場させられたんですのよ。

「あなたが矛なら盾はわたくしが務めます。さあ、とつとつと車をとつ

てきて元凶を探してぶちのめしますわよ！」

チャートが狂うからでしてよ

「助かりましたのじゃ…」

にやーん

男の背にいた老婆はホツとした様子で椅子に腰掛けた。霧がいよ
いよ濃くなつて何も見えなくなつたところで船の明かりを見つけて
なんとか乗り込んできたらしい。

「いったいいつからこの霧が？普通のことではないんですか？」

「普通？とんでもござりませぬ…。こんな霧は初めてですじゃ…」

「異常気象か。承太郎、何か気配を感じるか？」

「いや…正直何も感じない。霧で何もかも飲み込まれちまつてるみた
いにな」

承太郎はじろりと二人を見る。老婆は鋭い眼光に怯えたような顔
をした。どうにもきな臭い。

「婆さん、なぜ港にまでやってきた？」

「ああ、魚市場からの帰り道で、なにせ何見えんもので…足をくじき、
手まで怪我してしまつたところをその人に助けてもらったのです
じゃ」

老婆の言葉に男がびくつと反応する。

「あ?!…：…：そう、ですね。ええ。本当にもう何も見えなくてエ〜どう
しようかと困つてるところにお婆さんがいて」

男はヘコヘコと、誰に対してか媚びへつらつているように言った。
アラブ系ではない白人だが出稼ぎの労働者だろうか？

「待たせたなア〜二人とも！ん？なんだ？その人たちは」

「ああ、霧が濃くて困つていたみたいだ」

「へえ〜。よくここまで辿り着いたな。全然見えねーけど港って広い
よな？うっかり海に落ちなくてラッキーだったなあ…」

「ええ、彷徨つて彷徨つてやつと明かりを見つけて…」

ジョセフは承太郎、花京院のことをちらつと見た。二人はなんとも

言えない、と言わんばかりに肩をすくめた。

「紅茶を多めに入れておいてよかったな。大変だったろ」

ポルナレフは労しげに二人に紅茶を入れた。本当はお嬢様とアヴドウルのためのつもりだったがそれはまたあとでいい。男はちよつとそれを飲んで美味しいですという。しかし老婆の方はなにやらポルナレフをじつと見つめてカップを傾けようとしなない。

「どうしたんだ？ 婆さん。どこか具合が悪いのか？」

「い…いえ。ほっとして…ついブーツとしましたのですじや…」

ポルナレフの気遣わしげな視線に老婆は挙動不審になる。それを見て余計にポルナレフはかまう。

「ひぎ掛けでも持ってきてやろうか？ 粥とかのほうがよかったら作つてくるぜ」

「お気遣いなく」

「なああんだ」

「ヒツ…？」

突然承太郎が男に声をかけた。男はどこか怯えている。

「ここに来る途中で怪我したんじやあないか？」

「本当だ。大したことはできないが、手当を…」

確かに男の太もものあたりに血が滲んでいる。花京院がすかさず手当を申し出たが、男は固辞する。

「いや、大したことはありませんから」

その様子は明らかに何かに怯えていた。霧の中でなにかに襲われたのだろうか？ だとしたら、老婆の方はそれに気づいていないのか。

ジョセフが続いて男にたずねる。

「霧の中でなにか見なかったか？ たえばお嬢様とごつい占い師の二人組を…」

そのお嬢様と占い師の二人組、すなわちわたくしたちはなんとか車にたどり着き、乗りこんだところですよ。視界は最悪でしたけれど、あれ以降ソンの襲撃はありませんでしたの。

でもこれで船まで運転して戻るの嫌すぎますわ！ぜってえー事故りますの。

「……とりあえず車出しますわね」

「ああ。頼む」

まあてもごつつい四輪駆動車なのでそこんじよそこらの障害物は乗り潰すことができますわね。ゆっくり進めばコンテナにぶつかることもありませんし。

「さっきの話ですけれど、確かにわたくしがアヴドウル、あなたを信用してないと思われても仕方がないですわね」

「君が人の話をきちんと覚えているとはな」

「茶化さないでくださいまし。…とにかく、ちよつぱり反省してしまいましたわ。わたくしとあろうものが……！」

「悔しがるところがそこなのか」

「結論から言うと、わたくしはあなたと出会ったときからこれから起こることを知っていましたわ」

「……」

アヴドウルは何も言いません。ただ黙って聞いてくれます。車の外には灰色の霧が立ち込めています。わたくしはそれを凝視しながら続けます。

「理由は話せませんの。これを伏せていたのは、私の知っている未来通りにDIOの居場所がエジプトでないとチャートが狂うからです
てよ」

「チャート……？」

「DIOを確実に仕留めるには、ジョースター家…承太郎と旅の仲間たちが集まる今このときでなければいけなかった。…私がむやみにそれを話すことでそれが起きないことが怖かったですの」

嘘はついてませんわ。つていうか本心ですわ。これで信じてもらえなかったら諦めてアクセルを踏みしめて海にダイブするしかないですわよ。

「なるほど…時々意味不明なことをするのはそういわけだったのか」

「わたくしそう思われてたんですのね」

アヴドウルは笑っていました。満面の笑みではなく呆れ笑いですが。

「このことはジョースターさんたちにも言うべきなんじゃあないのかね」

「それはだめですわ。わたくしがこれだけ引つ掻き回してるのにDIOはわたくしの知る未来通りエジプトにいる。この理由がわかります?」

「……わたしを取り逃がしてなおエジプトにいる理由と同じだな。つまり…我々がどう動こうと、DIOは脅威に思っていない。しかし一方でジョースターさんが追い始めたら刺客を放つ。DIOという男はジョースター家の人間以外まるきり気にかけていないのだ」

「ですわ。逆にジョースターさんたちが敵の手の内をすべて知ってるかのように振る舞えばあちらも出方を変えるかもしれない」

「…なるほど。我々も舐められたものだ」

「ええ、おファツクムカつきますわよね」

そこでわたくしはブレーキを踏みます。視界の遮られた霧の中でもわかるほどの障害物が目の前に現れたからですわ。

当然アヴドウルもその異常事態に気づきます。

「これは……」

「ワールドウォーゼットのエルサレムみたいですわ!!」

船の周りに人ばかりですわ!!

「まさか全員撥ね飛ばすなどとは言わないよな」

「いつものわたくしならそうしますわ。でも冷静に考えると血脂でとんでもないことになりそうですし、車をおしやかにしたらタイムが…」

「ではどうする?」

わたくしは窓の外に見えるたくさんの背中を見て5秒だけ考えます。ゆらゆら揺れてウーウーって、まじでゾンビみたいですわね。「わたくしたちに見向きもしてない、ということはいつら出待ちですわ。標的は船の中…。歩いていきましようか?」

「まったく…退屈だな」

窓の外を見ていた花京院が目細めつぶやく。

「む、いま光が…」

「アヴドウルたちか？」

「いや。灯台の光かもしれない。なにせこの霧だ、車のライトが見えるとは思えない」

「それにしても遅いな。何かあったと考えるべきなんじゃあないのか」

「外に出たって迷子になっちまうぜ」

「ほくのハイエロフアントで周囲を探りましょうか」

「そうじゃな、それが…」

ガシャーンと音がした。老婆を連れた男が派手にカップを落としたりらしい。

「す、すみませえん。すぐお拭きしますからッ…」

男は何に怯えているのだろう。やはりどう見たっておかしい。慌てて掃除用具を探しに展望スペースから出ていった。

「やはり自分の目で一度外を確認するぜ。どうにもおかしい」

「じゃあオレも…」

とポルナレフが言ったところで老婆がおよよと泣き出した。

「おお…なんだか酷く腹が痛んできましたのじゃ…すみませぬ、ご迷惑ばかりおかけして…」

「いーっていーって、婆さん。オレがトイレまで連れてってやるからなあ…」

「ありがとうございますですじゃ…ポルナレフどの…」

「ではぼく外を見ます」

「ああ、よろしく頼む」

ジョセフは一人で手付かずのクロワツサンとチーズをつまみ、寂しそうに言った。

「うまいのにお…」